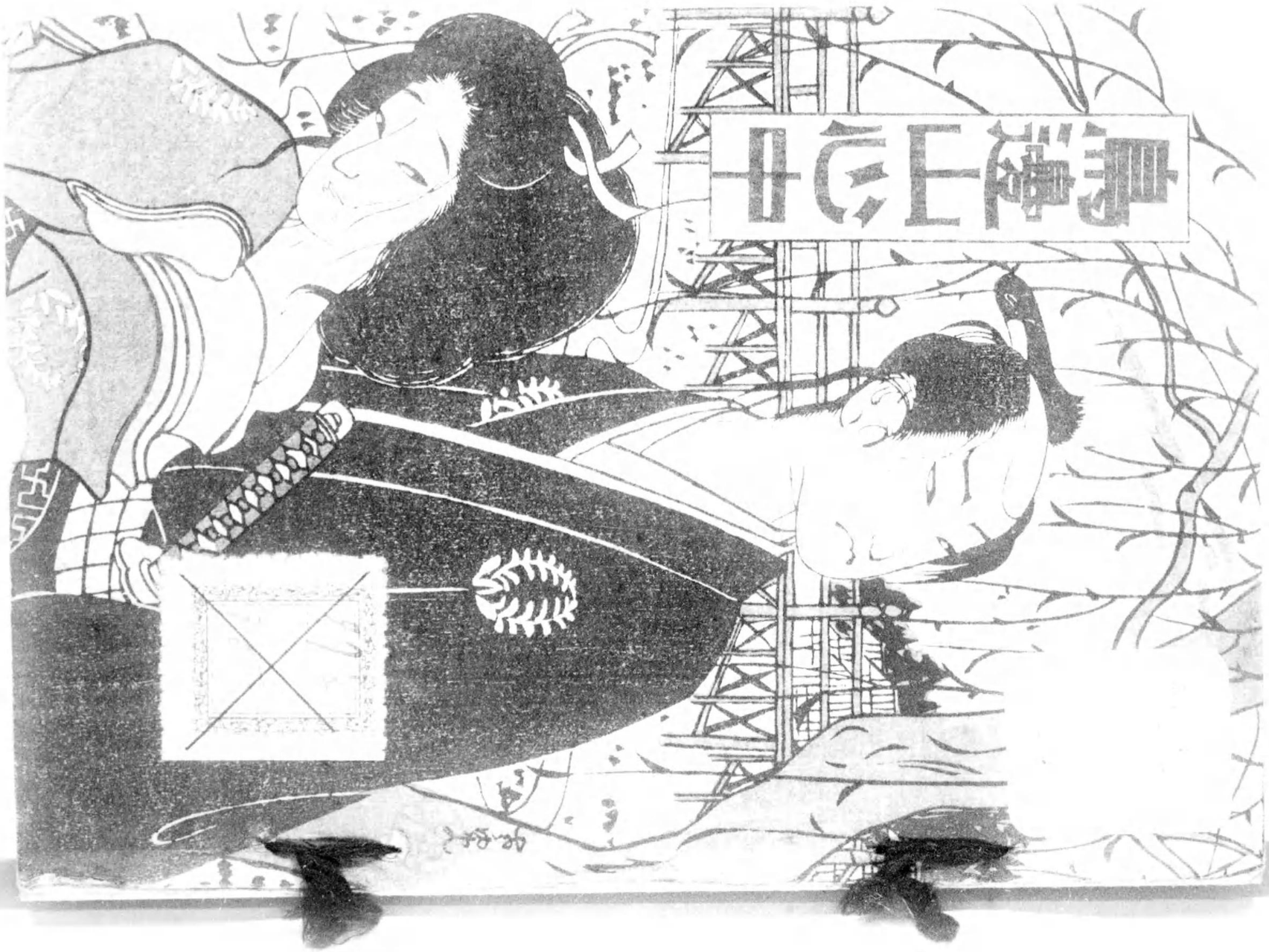
日露戦争
特101
556



特101
556

愛劇家へ

二三年前から文壇の中心興味は漸く小説から劇の方面に移つてまゐりました。新らしい劇！面白い脚本！此聲は現下の文壇に凄まじい絶叫であります。少くとも新らしい文學を語り、新らしい美術を味はゝんとするものは綜合藝術の粹である劇を知らなければなりません。この際我が社は要求に應ぜんが爲め現文壇新進氣鋭の名作家を網羅し、各編悉く作家が心血を流露せしめた近代脚本（上場出來る）の佳篇を續刊し、近代人の渦を醫せんとする劇界革新の曙光、新文壇の寵兒であります。幸に御愛讀を祈ります。

新脚本叢書第三編

馬鹿正直

岡本綺堂著

大正
6. 4. 26
内交

登場人名

菊地半九郎　若松の遊女お染
坂田市之助　同　お花
坂田源三郎　花菱の仲居お雪
菊地の若黨八介　他に仲居大ぜい
お染の父與兵衛

徳川時代。寛永三年十二月中旬。京都祇園の茶屋。常足の二重家體にて、上の方に床の間、つゞいて出入りの襖。庭には飛び石、石燈籠などあり。騒ぎ唄のやうな下方入りの鳴物にて幕あく。（時刻は夜）

（直に竹本の浮瑠璃になる。）

浮へ色里に、きて新らしき繻衣、お染と云へど何處やらに、染まぬ廓の風俗は、流石おぼこの町育。うき身は同じ簑蟲の、父をたづねて うろ〳〵と、座敷をぬけて忍び出で。

（奥の襖をあけて遊女お染、十七歳、あたりを窺ひながら出づ。）

お染。今ぞ雪さんが耳打して、河原町の父さんが尋ねて來たとのこと。はて、どこにゐさんすやら。

浮へ父の與兵衛は庭傳ひ、顔見合せて。

（下の方よりお染の父與兵衛、五十餘歳の商人、風呂敷包を背負ひて出づ。）

お染。おゝ、父さん。

與兵衛。娘か。

お染。よう來て下さんした。して、あの春着は出來ましたかえ。

與兵衛。（緣に腰をかける。）おゝ、出來た、出來た。話は後のこと。まあ見やれ。

淨へ包とく〳〵取出す、濃紫と黑綸子、男女の晴小袖。

（與兵衛は風呂包敷をあけて黑と紫の着物二襲ねを出す。）

お染。おゝ、ほんに美事に出來ました。父さん、たんとお禮を云ひまする。

淨へ父もほく〳〵打肯き。

與兵衛。はゝ、自慢するではなけれども、此の染色を見て呉りやれ。可愛い娘が廓へ來て來年は初の正月、どうかして他に負を取らすまいと、俺も蔭ながら案じてゐたら、江戸の好いお侍衆に馴染が出來て、春の衣裝も其のお客人に拵へて貰ふと云ふこと。

お染。ほんに廓へ身を沈めてから、日數も淺い妾とて、來る正月の紋日とやら物日とやらをどうしたものかと初めから案じてゐたに、店出しの

晩から御馴染になつた江戸のお侍、妾のやうな者でも可愛がつて下されて、夜も晝も揚詰め、ほかの座敷へはまだ一度も出たことがござんせぬ。まあ、喜んで下さんせ。

與兵衛。さあ、それぢやに因て、俺もそなたの爲、また二つには其の御客人の爲、成たけ無駄な入費をかけずに、好い品を誂へさせたいと思ふたので、廓へ出入の呉服屋を其方退けに、俺が懇意の店へ直接掛合、半分値とまでは行かずとも、二割も三割も格安に仕立てさせた上に、これ見やれ、どうも云はれぬ染の好さ。これなら誰に見られても恥かしいことは微塵もない。まあ、鳥渡手を通して見や。

お染。はて、お前もまあ氣の短い。まだお客人にも見せぬ中に、手を通しては濟まぬこと。いづれ春になつたらな。

與兵衛。おゝ、是非一度は其の衣裝を着た姿を……。

お染。見に來て下んせ。
與兵衛。拜みに來やうか。（手を合せる。）
お柔。あれ、父さんがてんごうばつかり。ほゝゝ。
與兵衛。はゝゝ。
淨へ起ち上りしが又見返り。
與兵衛。あゝ、これ、まだお目にはかゝらぬが其の江戸のお侍といふお方にの。俺が好うお禮を申して居りましたと、忘れぬやうに申上げて呉れ。よいか。
お染。あい、あい。
與兵衛。此頃は惡い風邪が流行るさうな。よう氣をつけたが可いぞよ。
お染。あい、あい。
與兵衛。（行きかけて又立戻る。）それから喃。そのお侍と云ふのはお酒を召上

るかの。
お染。あい。隨分たんと飲みなさんす。
與兵衛。そりやもう、あなたが召上るのは何んなに召上つても可いがの。そなたは其のお附合をして、必ず無理な酒を飲むまいぞ。勤する身に無理酒は大毒ぢやと云ふからの。
お染。よう合點して居りまする。
與兵衛。では、今云ふた俺の言傳を必ず忘れて呉れまいぞ。よいか、よいか。忘れるな。
お染。あい、あい。そう云ふお前こそ歸る道を忘れさんすな。
與兵衛。はゝ、這奴め。いつの間にか廊の水に染みて、そのやうな憎て口を覺えたな。はゝゝ……。
淨へ笑ふてこそは歸りけれ。

（與兵衛は下の方に去る。）

お染。あゝして父さんが喜んでゐさんすのも皆なあの半様のお屁、その揚げ詰の御座敷をぬけ出して、いつまでも斯んな處にゐては濟まぬ。どれ、早う行きませう。

浮へ行きかゝる後より、出合頭に。

（與より菊地半九郎、二十二歳の江戸の武士、酒に醉ひて出づ。）

お染。あゝ、お前は……。

半九郎。私を置去りにして、今まで何處に隠れてゐた。座敷をぬけて忍び男にでも逢うてゐたか。

お染。あい。このやうな男に逢うてゐました。（衣裳を見せる。）

半九郎。おゝ、春着が出來たか。廓の習ぢやとか云うて、私もそなたに釣合ふやうな新らしい小袖を誂へさせられたが、これが私のやうな武骨

者に似合ふかな。はゝゝゝ。まあ、よい、よい。兎も角も仕舞つて置いて呉りやれ。したが、折角拵へたその小袖も、そなたと對に着る日は無いかも知れぬ。

お染。え。そりや又何故でござんすえ。

半九郎。將軍家が江戸へ御歸りの日が迫つた。とばかりでは判るまいが、將軍家には先月初めに御上落、われ〳〵も御旗本の一人としてお伴の數に加はり、京に旅寢のつれ〳〵に測らずそなたと馴染を重ね、來春までは逗留と思うてゐたに、元旦の拜賀は俄に御模様替と相成り、當年内に當地を引拂うて、江戸表へ御下向と今朝支配頭から觸渡された。此上は所詮逗留は相成るまい。遲くも五日か七日の中には……。

お染。お別になるのでござんすか。

浮へ呆れて詞も涙ぐむ。

半九郎。逢ふ夜の數は繁くとも、馴染んでから足掛け二月、左ほどに深い仲でもなけれど、戀や情は扨置いて、まだ廓馴れぬそなたの不憫さに、及ばずながら今日までは夜も晝もこゝへ來て、そなたの力ともなつたれど、侍は御奉公が大切、お供に外れていつまでもこゝに逗留は思ひも寄らぬこと。察して呉りやれ。

お染。あい。(泣く。)

半九郎。市之助が無理に強るので、今宵は例よりも飲み過した。あゝ、酔ふた、酔ふた。これ、お染。水を一杯汲んで來て呉れぬか。

お染。あい、あい。

(お染は奥に入る。)

半九郎。思へば不憫な。あゝ、酔ふた。こりや堪らぬ。(肱枕して倒れる。)

淨へ無殘やお染は一晌に、百年經たる窶れ顔、別れと聞けば悲しさの、

涙に聲も顫はれて。

お染。(出る。)お冷を汲んでまゐりました。もし、半様。おゝ、いつの間にかうとゝ……。

淨へ男の寢顔を打眺め。

お染。忘れもせぬ先月の中旬、妾が初めて店出しの夜に、こゝへ呼ばれた初會の一座は、どなたも江戸のお侍、疎匆があつてはならぬぞと、親方さんから氣を付けられ。

淨へ怖々出るには出たれども、馴れぬ座敷の術無さに、唯何となく悲しくなり。

お染。廊下で獨りて泣いてゐたら、誰やら背後から窃と來て、はて何を泣く。泣くほど悲しいことがあれば、私が力になつて遣ると、見掛けは強さうなお侍が、優しう云うて下された。

浮へその嬉しさが身に染みて、今更思へば現しい。色の諸譯も知らぬ身が、歸ると云ふを引き止めて。

お染。無理に願ふた縁結び。店出しの初めから仕合せな客を取り當てたと、朋輩衆にも羨まれ、父さんにも自慢して、喜んだのもほんの束の間、矢張り妾は不仕合せに。

浮へ生れた者かと忍び音に、喞ち歎くぞいぢらしき。俄に奥は賑はしく、浮かれ立つたる市之助、お花の手を取りよろめき出で。

（奥より坂田市之助、半九郎と同じ年配の侍、遊女お花の手を取りて出づ。お染は着物を床の方に置く。）

市之助。これ、半九郎は何處に、何處に。おゝ、お染はこゝに……。半九郎も居たわ、居たわ。（これも酒に醉ひたる體。）

お花。ほんに二人ともに手の惡い。座敷をぬけて隠れ遊び、此のまゝでは

堪忍なりませぬぞ。なあ、市様。

市之助。さうぢや、さうぢや。其の罰には何が好からうな。何は兎もあれ、起せ、起せ。

お染あい、あい。（半九郎を抱き起す。）もし、お連衆が見えましたぞえ。

半九郎。（眼をひらく。）おゝ、市之助か。座敷を替へて飲み直さうと云ふ洒落か。面白い、面白い。（起き直る。お染は水を出す。半九郎は飲む。）

市之助。さあ、仲居どもこれへ呼べ。

（お花は手を叩く。あい〳〵と答へて、奥より仲居大勢出る。或は燭臺を持ち、或は酒肴を運ぶ。）

市之助。さあ、さあ、陽氣に騒げ、騒げ。京で遊ぶも最う四五日ぢや。江戸への土産に面白いことのあるたけを盡して歸らう。

お花。折角斯うしてお馴染になりましたに、お名殘惜しいことでござんす

な。もうこれ限りお目にかゝれまいかと思へば、心細いやうでなりませぬ。お染どのも其れを知つてかえ。

お染。あい。たつた今初めて聞きました。

市之助。聞いて定めて泣いたであらな。はて、隠すな。白粉が涙で汚れてゐるわ。はゝゝゝ。これ、半九郎。お身は先刻から何故默つてゐる。面白い〳〵と云ふた口の下から屈託らしい顔附、何ぞ仔細のある事か。

淨へ問はれて屹と顔をあげ。

半九郎。さて、市之助。お身と我とは竹馬の友ぢや。遠慮なく頼みたい事がある。

市之助。改まつて何ぢやな。

半九郎。斯様な場所で申すも異なものぢやが、思ひ立つたら一晌も待たれぬ。この半九郎に二百兩の金を貸して呉れぬか。と云ふた處で、お身

も旅先で其れだけの貯へはあるまい。お身は京の刀屋に知己があるさうな。私の刀は備前物ぢや。その刀屋に談合して、二百兩に替へては呉れまいか。

淨へ市之助は眉を顰め。

市之助。思ひも寄らぬ頼みぢやが……。其の二百兩の費途は……。

半九郎。京の鶯を買ひたいのぢや。

市之助。京の鶯……。はて、お身にも似合はぬ風流なことぢやな。（云ひつゝお染を見返りて扨はと首肯く。）ひゝゝ、して其の鶯を江戸へ連れ行くのか。

半九郎。いや、籠から放して遣れば好いのぢや。大方舊巣へ戻るであらう。

お花。二百兩の鶯とは……若や其處らに啼いてゐる……。（お染を見返る。）

市之助。いや、そなたの口を出す所でない。（眼で制して。）さて、半九郎。外見の場所と云ひ滿座の中で、それを打出すお身の心の中は、市之助も好

う察してゐるが、そりや惡い料見、お身は餘りに正直過ぎやうぞ。

半九郎。え。

市之助。私も鶯は大好ぢやで、行く先々で鶯を聞いて歩く。殊に京は鶯の名所、金に明かし、暇に明かして、思ふさま鳴かせて見たが、所詮は一時の興に過ぎぬ。江戸へ歸れば又江戸の鶯がある。

半九郎。ぢやに因て、私も其の鶯を江戸へ持歸らうとは思はぬが、鳴く音が餘りに哀れぢやゆゑに籠から放して遣りたいのぢや。半九郎は人も知つたる意地張ぢやが、生れ附から涙脆い男、有餘る金を持つた身でも無し、家重代の刀を賣つて……これ、察して呉れ、察して呉れ。

市之助。それも鶯を買ひ取つて、わが物にでもすることか。籠から放して遣るだけに、家重代の寶を手放そとは、まだ分別が至らぬ。何事も然う一向には思ひ詰めぬものぢや。

淨へ取合ふ氣色もなかりけり。お染は悲しさ勿體なさ、心で窃と手を合せ、泣くより外に事ぞ無き。

市之助。さあ、これで鶯の話は濟んだ。息のある中に行く先々で、面白いこと爲盡したいのが、われ等一生の願望ぢや。（杯を取る。）さあ、注げ、注げ。

仲居。あい、あい。（酌をする。）

市之助。半九郎も飲め、飲め。

半九郎。むゝ。私も飲まう。（大きい椀を取る。）さあ、これへ注いで呉れ。

市之助。ほう、小氣味が好い喃。

淨へ笑ひさゞめく折柄に、坂田源三郎血氣の侍、苦り切つてぞ打通る。

お雪。（下の方にて。）まあ、まあ、お待ち下さりませ。

（お雪は仲居の風俗にて、市之助の弟源三郎を止めながら出る。源三郎は十九か

二十歳位の侍、羽織袴、大小にて、お雪を突き退けて庭先に入來る。）

源三郎。兄上、これにお出でなされたか。

市之助。おゝ、源三郎か。何しにまゐつた。

（源三郎は縁に上りて座に着く、半九郎は默つて酒を飲んでゐる。）

源三郎。（苦々しげに一座を見返る。）拙者は兄に火急の用事があつてまゐつた者。じやらけた女どもは見るも目障りぢや。皆、立て、立て。

淨へ睨み廻され勃然として。

お花。お前は市様の弟御さうな。いつも〳〵親の仇でも尋ねるやうなむづかしさうな顔ばかり。些と兄さまを見習うて、お前も粋にならしやんせ。江戸への土産に好い女郎衆をお世話しよ。京の女郎と大佛餅とは、唯見たばかりでは旨味の知れぬもの。嚙みゞめて味ふ氣があるなら、お前も若いお侍、此方から身揚りして懸るほどの心中者がないとも限らぬ。兄嫁の妾が意見ぢや、一座になつて面白う遊ばんせ。

源三郎。えゝ、つべこべと囀る女め。おのれ等の分際で、武士に向つて假にも兄嫁呼はり、戯れとて容赦はせぬぞ。（刀を引寄せる。）

お花。おゝ、何ぼ妾等のやうな果敢ないものでも、鱧の骨切を見るやうに、さう安々とは切られまい。さあ、兄さまの眼の前で、美事妾を切つて見やんせ。

淨へ冷み笑へば堪忍せず。

源三郎。おのれ其の頬桁を……。

（刀を引寄せるを、お染を始め、仲居等は寄りて支へる。半九郎は寢轉びて見物してゐる。）

市之助。源三郎、鎮まれ、鎮まれ。こゝを何處と思うてゐるのぢや。

淨へ源三郎は膝つき寄せ。

源三郎。それは拙者よりお尋ね申すこと。兄上こそ此處を何處と思召す。曩に御上洛の將軍家は俄に御歸りと觸れ出され、お伴してまゐりし江戸の諸侍も、遠からず京地を引拂ふに就ては、上の御用は申すに及ばず、各自の諸支拂ひ買ひかかりも綺麗に濟ませ、江戸への土產物も買ひ調へ、親類中の年寄どもへは神社の御符も頂いて行かねばならず、昨日は愛宕、今日は鞍馬と、天狗のやうに駈け廻る。その忙しい最中に、短い冬の日を悠長らしい色里の居續け遊び、私の用向は拙者一人が手足を擦切らしても事は濟めど、上の御用は一人が一人役、それでお前樣のお役が勤まりまするか、組頭の首尾が好いと思召すか。京三界まで一緒に連れ立つて來て、弟に苦勞さするが兄の手柄か。少しは分別なされませ。

淨へ疊たゝいて云ひまくれば、一座も白けて見えにけり。兄も少しく持餘し。

市之助。もう可い、もう可い。何も彼も判つた、判つた。兄もやがて歸るほどに、そちは一足先へ歸れ。

淨へ見え透いた一寸逃れと、弟は中々合點せず。

源三郎。いや、どうでお歸りなさるゝならば、拙者も一緒にお伴申す。さあ、直にお仕度なされませ。

市之助。それは無理と云ふものぢや。歸るには相當の仕度もある。まあ、何でも可いから先へ行け（起ち上る。）

源三郎。あ、兄上……。

市之助。はて、馬鹿堅い奴。野暮を申すな。

（市之助は奥に入る。お花もお雪も仲居等もつゞいて奥に入る。）

源三郎。えゝ、情ない兄上……。もう一度御意見して、無理にも連れて戻

らにやならぬ。さうぢや。

浮へ起たんとするを引止め。

（今まで横になりゐたる半九郎は顔をあげる。）

半九郎。源三郎、待て、待て。

源三郎。おゝ半九郎か。

半九郎。斯様な場所で立騒いでは見苦しい。今夜は溫順う歸つたが可からうぞ。兄は必然この半九郎が連れて戻る。安心して歸れ、歸れ。

源三郎。いや、安心してはゐられまい。一つ穴の貉が安受合を、眞に受けて歸られうか。兄が斯様な白痴を盡すも、お手前のやうな不仕埒の朋輩があればこそぢや。よい朋輩を持つて兄は仕合せ、拙者屹とお禮を申すぞ。

浮へむしやくしや紛れの八つ當り。

半九郎。はゝ、そのやうに怒るものでない。お手前はまだ年が若いで、他ばかり惡い者のやうに云ふが、兄は兄、拙者は拙者ぢや。兄が遊ぶと拙者が遊ぶとは、同じ遊びでも心の入れ方が違ふかも知れぬ。まあ、何にも云はずに歸れ、歸れ。

源三郎。歸らうと歸るまいと拙者の勝手ぢや。

浮へ又起ちかゝるをお染は取付き。

お染。半様もあのやうに云うてござれば、まあ、まあ、お待ちなされませ。

源三郎。えゝ、面倒な。退いて居れ。

浮 孱弱き女を突き放せば、力餘つてよろ〳〵、倒れかゝりし膳の上、酒も肴も飛び散つたり。半九郎も短氣の男。

半九郎。やい、源三郎。年下の者と思うて和かに接うてゐれば、云ひたい三昧の惡口、仕たい三昧の狼藉、もう堪忍がならぬぞよ。素直に手を

下げて詫びて歸れば可し、左もなくばおのれの襟髪を引掴んで、狗兒のやうに門端へ投げ出すぞ。

源三郎。はゝ、そのやうな脅しを怖がる源三郎でない。夜晝と無しに兄を誘ひ出して、あたら侍を腐らせた惡い友達。江戸の侍の面汚しめ。そつちから詫びをせねば堪忍ならぬわ。

淨へ負けず劣らず軋み合ふ。傍にお染は手に汗握り。

お染。どちらが何方とも云はれぬ此場の仕儀、況てお二人ともに同じ御朋輩、もうお互ひに料見して……。

半九郎。いや、其の料見はもうならぬぞ。おのれ此の半九郎を江戸の侍の面汚しと云ふたな。其の仔細を申せ。

源三郎。仔細は今更云ふまでもないことぢや。御用を怠つて遊里に入浸る奴、それが武士の手本になるか。聞きたくば幾度でも云うて聞かす。

菊地半九郎は侍の面汚し、恥曝し、武士の風上にも置かれぬ奴ぢや。

半九郎。おゝ、好う云ふた。おのれも武士に向つて其れほどの事を云ふからは、相當の覺悟があらう。

源三郎。おゝ、念には及ばぬ。武士にはいつでも覺悟がある。

淨へ解けぬ詞の行き懸り、半九郎はつゝと起ち。

半九郎。問答無益ぢや。源三郎、河原へ來い。

源三郎。面白い、眞劍の勝負せうか。

淨へいづれも堪えぬ血氣と短氣、押取り刀で立ち出づれば、お染ははつと氣もそゞろ。

お染。何ぼ侍衆ぢやと云うて、瑣細な事から云ひ募り、眞劍の果し合とは、餘りと云へば餘りの御短慮。これ拜みます、賴みまする。どうぞ既う一度分別して、仲直りして下さんせ。

浄へ拜み廻るを又蹴放し。

源三郎。女が留むるを幸ひに、云ひ出した勝負を止むるか。卑怯者め。

半九郎。何の……。さう云ふおのれこそ逃るなよ。

浄へ二人は縁より飛んで降り、支ゆる女を刎ね退けて、河原へ走りゆく

水の、あはれやお染は起ちつ居つ、人を呼ぶ間もあらばこそ、跡を慕うて……。

四條の河原。夜の景色。所々に枯柳の立木などあり。水の音聞ゆ。

浄へ往來さへ、暫し絶えたる夜の道、四條河原も冬ざれて、水の音のみ物寂し。

與兵衛。(出づ。)あゝ、暗い晩ぢや。河原を通る方が近道のやうに思うてゐたが、斯う云ふ晩には矢ぱり町つゞきを歩いた方が優であつたかも知

れぬ。祇園を出てから路寄りをしてゐたので思ひのほかに夜が更けたやうな。どれ、どれ、急いで歸りませう。

(千鳥の聲聞ゆ。)

與兵衛。おゝ、千鳥が鳴く。いつも聞き慣れてゐるものゝ、赤兒の啼くやうな哀れな聲ぢや喃。はゝ、今頃は娘もあの春着を江戸のお客人に見せて、定めて自慢してゐることであらう。同じ勤めをしてゐても、あゝ云ふ力になる頼もしい客人があれば、親方の首尾も好し、娘も氣丈夫、俺も安心と云ふものぢや。おゝ、千鳥が又鳴くわ。千鳥も寒からうが、俺も寒い。風邪引かぬ中に行きませう。おゝ、よい鹽梅に雲の缺けた所から薄月が出たやうな。

浄へ呟き〳〵行きかけて。

(與兵衛は下の方に去らんとして、上の方を見返る。)

與兵衛。や、誰やら斬合うてゐる様子。おゝ、刃物が光るわ。おゝ、おゝ、段々こつちへ斬結んで來るらしい。喧嘩か物取か知らぬけれど、傍杖の怪我せぬ中に、行きませう、行きませう。さうぢや、さうぢや、

淨へやがて嘆きの種ぞとも、知らぬ白髪の型老爺、足を早めて立歸る。

（與兵衛は急いで立去る。水の音はげしく上の方より半九郎と源三郎は斬結びながら出づ。月は折々に隱れて、二人は探りながらに闘ひ、半九郎は遂に源三郎を斬倒す。月は又明るくなる。）

淨へほつと一息月かげを、たよりにお染は走り付き。

（上の方よりお染走り出づ。）

半九郎。おゝ、お染か。

お染。半様、御怪我はなかつたか。して、相手のお侍は……。

半九郎。この通りぢや。

お染。え。

淨へ一目見るより慄然として、歯の根も合はず顫ひゐる。男は騒ぐ景色もなく、刀を鞘に收めても、納り兼ねし胸の闇、暗きに迷ふばかりなり。

（半九郎は源三郎の死體を片寄せ、河の水を掬ひて飲む。お染も手眞似にて自分にも飲ましてと云ふ。半九郎は水を入れる物が無いと云ふ思入にて自分の裲襠の袖を引き裂きて水を浸し、お染の口に啣ませる。千鳥鳴く。）

半九郎。孱弱い女子が血を見たら、定めて怖しくも思ふであらう。どうぢや、もう落着いたか。

お染。は、はい。

淨へとは云ふものゝ案じられ。

お染。妾はこんな勤の女子、お武家の法は何にも知りませぬが、斯うして人一人殺してもお前に何の御咎もござんせぬかえ。

半九郎。さあ、生れ付短氣の上に、酒には醉つたり、詞の行きがゝり、堪忍のならぬ破目となつてあたら朋輩一人を手にかけたが……。今更思へば無分別。上洛の間は身持を慎み都の人に笑はるゝなと、豫て支配頭より觸れ渡されてあるに、場所は色里、酒の上の口論、加之も朋輩を打ち果しては罪を逃れんやうもない。

淨へ流石に酒の醉醒めて、半九郎は茫然と今更悔むも甲斐ぞ無き。

お染。そんなら矢張りお侍でも、人を殺した罪は逃れず。

半九郎。尋常に切腹するか。但しは兄の市之助に仔細を打明け、弟の仇と名乘つて討たるゝか。二つに一つの他はあるまい。

お染。えゝ。

淨へ呆れて詞もなかりしが。

お染。おゝ、さうぢや。これを知つてゐるは妾一人、他には誰も見てゐぬ

のを幸ひ、早うこゝを逃げて下さんせ。

半九郎。何を馬鹿な。半九郎はそれほど卑怯な男でない。差したる意趣も遺恨もないに、朋輩一人を殺したからは、潔よく罪を引受くるが武士の道ぢや。若松屋のお染の客は人殺しと、明日は世間に謳はれて、そなたも肩身が狹からうが、これも因果ぢや、堪忍せい。

お染。何の、何の、勿體ない。足かけ二月明暮れに、不憫を加へて下された、御恩は山ほどあるものを、まだそればかりか立ち際に、重代の刀を手放しても、妾を受出して親許へ歸して遣らうとの思召は、あんまり冥加がおそろしく、心で拜んで居りました。もし、半様。どうでも死なねば濟まぬなら、一緒に死なして下さんせ。

半九郎。いや、それも亦無分別、由ない義理を立て過して、この半九郎に命までも呉れやうとは、親の嘆きを思はぬか。

お染。その嘆きを思はぬではなけれども、お前と云ふものに取縋り。

淨へわたしは今日まで生きてゐた。

お染。先刻あの祇園の茶屋で、もうお別れと聞いた時から、心は疾うに死んだも同様。日本中に二人とない、頼もしいお人に引分かれ。

淨へ年期の長い勤め奉公、どう辛抱がなるものぞ。

お染。店出しの宵からお前様の揚詰で、汚れのない妾の身體は、何處までも半様一人を夫として、清い一生を送りたさ。

淨へ聞き分けてたべ察してと、身を投げ伏してぞ泣きゐたる。

半九郎。私もそなたを色里に沈めて置くがいぢらしく、身請して親許へと、思ひしことも食ひ違うて、斯うなるからは寧そのこと、そなたを殺すはそなたを救ふ、慈悲の殺生であらうも知れぬ。濁りに沈んで濁りに染まぬ、清い處女と戀をして……。

お染。死ぬる際まで離れずに……。

半九郎。そんならこゝで……。

お染。あゝ、もし。（囁く。）

半九郎。成程、屍を河原に曝さうよりも、いかなる人も遂に行く鳥邊の山を死場所と……。

お染。折角拵へた二人の春着を、あたら形見に殘さうよりも、死んでゆく身の晴小袖。

半九郎。武士も討死と覺悟すれば、鎧物具美事に扮で裝ち、立派に死ぬるが世の習。

お染。忍んで茶屋へ引返し。

半九郎。死裝束を取つて來やうか。お染、來やれ。

お染。あい。

淨へ風に亂るゝ枯柳、招くがまゝに引かれゆく。

（二人はあたりを窺ひながら上の方に忍び入る。下の方より半九郎の若黨八介、足早に出づ。月は又隱れる。）

八介。やれ、暗いことぢや、折角月が出たと思たふに、雲めが又邪魔をし居つた。

（上の方より仲居お雪出で來りて、思はず八介に突き當る。）

お雪。おゝ、御免なされませ。

八介。さう云ふのは仲居のお雪殿ではないか。

お雪。ほんに八介殿でござんしたか。

八介。支配頭から火急のお招ぎで、旦那のお迎ひに來たのぢやが、いつもの通りお在でありうな。

お雪。さあ、それが大變。お前の旦那の半様は市様の弟御と果し合をな

されうとて、この河原の方へ來られたとやら。

八介。え。して、して、それは何時のことぢや。

お雪。たつた今のことでござんす。

八介。たつた今なら何處ぞで太刀の音の聞えさうなものぢやが……。何にしても其れは誠に一大事ぢや。（上の方へ行かうとする。）

お雪。もし、もし、そつちではござんすまい。

八介。では、こつちか。（下の方へ行きかけて。）いや、こつちは私が今來た路ぢや。何にしても斯う暗うては埒があかぬ。早う提灯を持つて來さつしやれ。

お雪。合點でござんす。

（お雪は行きかけて躊き、透しながらに上の方に引返す。）

八介。さあ、さあ、大變なことが出來て了ふたぞ。何で又、市之助様の弟

御と果し合などなされたのか。えゝ、斯うしてゐても氣が揉める。
無駄とは知りながらも最う一度こつちの河原を探して見やうか。（下の方に入る。）

（時の鐘、これより竹本の出語りになる。）

淨へ一人來て、二人連れ立つ極樂の、清水寺の鐘の聲、九つ心くらき夜に、捨つる此の身はいさ鳥邊野へ。女肌には白無垢や、上にむらさき藤の紋、中着緋紗綾に黒繻子の帶、年は十七初花の、雨にしほるゝ立姿。

（お染は文句の通りの拵へにて、紫の布にて顏をつゝみ、上の方より忍んで出であたりを窺ふ。）

淨へ男も肌は白小袖にて、黒き綸子に色淺黃うら。

（半九郎は文句の通りの拵へにて、同じく黒の綸子にて顏を隱し、後より出る。茶屋の騷ぎの笛聞ゆ。）

淨へ鳥邊の山はそなたぞと、死にゆく身のうしろ髮。

半九郎。ひく三味線は祇園町。

お染。茶屋のやま衆が色酒に、

半九郎。みだれて遊ぶ騷ぎ合ひ。

お染。あの面白さ見る時は、

淨へあの面白さ見る時は、過ぎし霜月十五日、初の御見を思ひ出す。

お染。おゝ、今更それを云ふも愚痴でござんす。さあ、些とも早う。

半九郎。お染。

お染。半樣。

（月隱れる。二人は手を取りて行かうとする時。上の方よりお雪は提灯を持ちて先に立ち、後より市之助とお花出づ。）

市之助。それへゆく二人連は……。

（お雪はつか〳〵と寄りて提灯を差付るを、半九郎は叩き落す。下の方より八介も出で來りて半九郎に突當るを、半九郎は八介を突き放し、お柒の手を取りて向ふへ走り去る。皆々後を透し見る。）

浮へ河原傳ひに……。

（床の三重、時の鐘。）

幕

（松竹合名會社興行權所有）

大正六年四月十日
大正六年四月十三日印刷
大正六年四月十五日發行
大正六年四月廿參日發行

【新脚本叢書第三編】
定價貳拾錢

著者　岡本綺堂

發行者　東京市神田區錦町三丁目六番地　富岡直方

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　中田福三郎

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

脚本　鳥邊山心中

岡本

發行所　東京市神田區錦町三丁目六番地　平和出版社
振替東京八七八七番　電話本局三三六六番

278
900

脚本叢書第一編

調書尼

吉井　勇著

定價貳拾錢
送料四錢

本脚本は市村座二月興行に上場し喝采を博せる者。殺伐な鎌倉時代を背景とし、戀に破れ愛兒を失へる尼僧を中心とせる悲哀劇なり。

脚本叢書第二編

京の友禪

岡本綺堂著

定價貳拾錢
送料四錢

櫻咲く春は物狂はしきような頃である。されど傷みを抱く者には悲しみは更に深い落花の哀しきを思はせるやうな悲劇である。

本錄宣言

正宗白鳥著

定價九拾錢
送料八錢

文壇に動かし難はざる地位を有する白鳥氏の小説集である。本書の出版が讀書界に一波瀾を引起すべきを信じて疑はぬ。

最新刊

繪卷脚本八番

岡本綺堂著

定價一圓
送料八錢

劇作家を以て鳴る氏の脚本集である。多くは都下の劇場に上場されて好評を得た作である。本書に依り又劇界の傾向を窺ふ事も出來よう

最新刊

西鶴五人女

吉井　勇著

定價一圓
送料八錢

彼の西鶴の作、五人女を拉し來り之れを現代の新しい觀察の下に劇に仕組めるものそれ等の女が極めて深刻に描寫されてゐる

近刊

柳書花明

田山花袋著

定價壹圓
送料八錢

自然派の元老たる花袋氏得意の題材たる花柳の巷を描き出せる小說集、讀書界の一大收穫として本書を薦む。

新刊

兩國の秋

岡本綺堂著

□小村雪岱裝幀

定價九十錢 送料八錢

—内容—

兩國の秋
子供役者の死
刺物師の話
雨月物語
心中浪華春雨
鳥邊山心中
番町皿屋敷

徳川末の華やかな時代を背景にして、蛇使の女太夫と旗本の次男との戀を描き出したのが兩國の秋である。此作が本書中の雄作であり且氏としても代表的の作品であらうと思ふ。鳥邊山心中は明治座初春狂言に演ぜられた大喝采を博せるもの、雨月物語と云ひ、子供役者の死と云ひ皆傑出した作である、是等を纏めて一冊とせる本書の價値を認めて頂きたい。

鮨崎英朋著

泉鏡花小唄入
柳川春葉序

三版

英朋畫集 うた姿

定價壹圓五十錢 送料八錢

泉鏡花著

小村雪岱裝

再版

雪の歌舞伎

定價九拾五錢 送料八錢

發兌 東京神田區錦町三の六 電話本局三三六六番 平和出版社 振替口座 七八七八

終